

2022年8月21日 主日礼拝

説教題「青銅の扉を破る方」詩編 107 編 1～16 節

主任牧師 加藤 誠

『恵み深い主に感謝せよ／慈しみはとこしえに』と(詩編107編1節)、「主は青銅の扉を破り、鉄のかんぬきを砕いてくださった」(同 16節)

詩編 107 編は『主の救いを味わった者たちの感謝の詩編』と呼ばれています。礼拝に集ってきた人びとが、それぞれ苦難の中で出会った主なる神の救いを語り、その告白を受けて、会衆みんなで感謝の賛美をささげるのです。今朝は前半部しか読んでいませんが、詩編 107 編全体で四つの感謝がささげられています。①荒れ野をさまよっていた人が主の導きを得て目的地にたどり着くことができた感謝。②捕虜となり鉄の枷をはめられて闇と死の中に歩んでいた人が解放された感謝。③食べ物がのどを通らないような苦しみの中に死を覚悟した人が救い出された感謝。④船乗りたちが嵐の中で救われ無事に港にたどり着くことができた感謝…です。

その中に、新共同訳では一段低くなっている言葉が何か所か出てきます。例えば 6 節「苦難の中から主に助けを求めて叫ぶと、主は彼らを苦しみから救ってくださった」、8 節「主に感謝せよ、主は慈しみ深く、人の子らに驚くべき御業を成し遂げられた」ですが、この部分は会衆が声をそろえて賛美したのだろうと言われており、13 節と 15 節も同じ言葉が繰り返され、詩編 107 編では全部で 4 回、繰り返されています。司式者が 1～5 節を歌い、会衆が 6 節を歌う。そして司式者が 7 節を歌うと会衆が 8 節を歌うという具合に、司式者と会衆とが交互に歌いながら、「恵みと慈しみに富みたもう主なる神への感謝」を高らかに賛美していったのです。

特にこの 10 節以降の部分は、イスラエル民族のバビロン捕囚の体験が重ね合わせて語られていると言われます。バビロン捕囚はイスラエル民族にとって、民族の存亡にかかわる歴史的苦難であると同時に、信仰の再生に導かれた歴史的事件でありました。不思議なことですが、バビロン捕囚を体験したからこそ、イスラエルの人びとの信仰は再生し、新しく生まれ変わることができたし、バビロン捕囚があったから、今日私たちが手にしている「聖書」は生まれたのです。

バビロン捕囚という大きな苦難において、イスラエルの人びとは「自分たちはいったい何者か、自分たちはどこから来て、どこに行こうとしているのか」という問いと向かい合う機会を得、改めて、自分たちを慈しみ、生かし、導いてくださる主に対する信仰に立ち戻らされたのでした。そして彼らの信仰が再生された時、不思議なことに彼らは、バビロニア帝国自身の破綻と崩壊によって、つまり神さまの恵みによって「青銅の扉と鉄のかんぬき」という、自分たちの力では決して打ち破ることのできなかつたバビロニア帝国の支配からの解放に導かれた、再び約束の地に戻ることもできたのでした。

若い時に父に言われた言葉が残っています。「信仰の歩みにおいて、人は必ず挫折する。自分の弱さ、自らが抱えている罪の深さゆえに、必ず挫折を経験する。けれども、挫折を通し、神に立ち帰ることを学ぶ時、信仰は高められ深められていく。だから挫折において自分の弱さを神の前に認め、告白できる人は幸いだ」と。

人は必ず挫折する。「それなりに自分はうまくやれている」。そう思っている時が曲者です。小さなおごりが神を忘れさせる。神を前にして歩むのではなく、神を後ろにして、神を従える歩みになり、小さなほころびが大きな破綻につながっていく。けれども主なる神は、その破綻と苦難の中に共に歩んで下さり、私たちを真実と愛に導き続け、私たちを新たな存在に造り変えてくださる。ここに私たちの希望があります。ただこの、主なる神による信仰の再生の恵みにあずかっていくためには、イスラエルの民がそうであったように、自分たちの誤りはどこにあったのか、自分の不信仰と弱さを神さまの前に認め、告白していくことが必要なのです。

先週の8月14日、77回目の8月15日を前にした礼拝に、シンガポールのエドウィン・ラム先生をお迎えできたことはとても意義深いものがあったと思います。ラム先生の二人のおじいさんは、シンガポールに侵攻してきた日本軍に連行され処刑されたということでしたが、ラム先生は「過去は過去。過ぎたことであり、私たちはイエス・キリストにあって新しく生きることができる」と語ってくださいました。毎年、私たちは広島と長崎に原子爆弾が落とされた大きな悲慘を思い起こす中で8月15日を迎えるのですが、自分たちの国が受けた被害、悲しみと苦難には心が向けられても、あの戦争で日本がアジア諸国の人びとに与えた大きな苦難については、なかなか具体的に心に刻むことができていないように思います。自分たちが受けた悲しみや苦難だけでなく、自分たちが与えた悲しみや苦難を見つめることを通して、私たちははじめて「平和」を語るができるのだと思います。というのは、「平和」はわたしと誰かとの間の「関係性」だからです。わたしにとっては心地よい関係であっても、相手にとってはしんどくて辛い関係かもしれない。わたしから見るだけでなく、相手から見たらどうなのだろう？相手から見た自分の姿というものを、神さまの前に謙虚に見つめることができた時に、はじめてお互いの間の「平和」について考え、また祈り合っていく出発点に立てるからです。

私たちは日本の歴史の闇を見つめたり、また自らの闇の歴史を見つめたりすることに消極的なところがあります。闇を見つめ、自分の弱さと向かい合うことはしんどいことであり、勇気が求められるからです。けれども、イスラエルの民がバビロン捕囚を通して自分たちが抱える闇を見つめる中ではじめて「青銅の扉を破る方」としての主なる神の恵みと希望に導かれていったように、私たちもまた自らの闇の歴史を見つめ、向かい合う中に、神さまが見せてくださる恵みと再生の希望を信じていきたいのです。最後に詩編85編9～12節を読んで終わります。アーメン。